

韋応物「冰賦」の諷諭性について

山田 和大

はじめに

韋応物詩は五百七十首が現存しており、韋詩を読む機会には比較的多く得られる。一方、韋応物の散文作品は非常に少なく、妻元蘋墓誌、「大唐故東平郡鉅野縣令頓丘李府君墓誌銘并序」、そして、『韋蘇州集』系統の版本のはじめを飾る「冰賦」(巻一)の三つしか見られない。

本稿では、「冰賦」を採りあげる。「冰」は韋応物詩に二十例見られ、人の心の清らかな性質を表したり、「雪」とともに冬の厳しい寒さの象徴として詠われたりする。

「冰賦」は、これらとは異なる「冰」のイメージを詠う。

この点について、韋応物には「夏冰歌」(巻十)という、内容・表現ともに「冰賦」とリンクするかのようにならされている歌行がある。「夏冰」を主題として詠む作品は少なくとも『文選』、韋応物以前の唐詩には見られず、モチーフの選定という点で興味深い。また、いずれもその「夏冰」を用いつつ諷諭性を持っている点でも共通する。

そこで、本稿では「冰賦」を検討するための比較対象として「夏冰歌」の内容をまず確認する。その上で、「冰

賦」の内容を、「夏冰歌」との相違点を含めて詳しく見ていく。最後に「冰賦」の諷諭性の背景について考察してみたい。

なお、韋作品は、『四部叢刊』本『韋江州集』によった。

一 「夏冰歌」の内容

まず、「冰賦」と全く同じモチーフを使う「夏冰歌」を換韻箇所に基づき四段に分け、内容を確認する。

1 出自玄泉杳杳之深井 出づるに玄泉の杳杳たるの深井よりし

2 汲在朱明赫赫之炎辰 汲まるるに朱明の赫赫たるの炎辰に在り

3 九天含露未銷鑠 九天に露を含みて未だ銷鑠せず

4 閭闔初開賜貴人 閭闔に初めて開き貴人に賜ふ

水は暗くて色の濃い泉のわき出る深い井戸に生じ、暑い夏の盛りに汲み出される。天下のどこにあっても

露を含んでいながら溶けることはなく、宮殿の門が開かれて身分の高い人々に下賜された。

作中舞台の設定をする。深い井戸から汲み出された氷が夏のさなかでも溶けることなく、宮殿に集まる人々に振る舞われたことを述べている。

5 砕如墜瓊方截璐

砕かるること瓊を墜とすがごとく方なること璐を截るがごとし

6 粉壁生寒象筵布

粉壁 寒を生じ象筵布かる

7 玉壺紈扇亦玲瓏

玉壺紈扇も亦た玲瓏たり

8 座有麗人色俱素

座に麗人有りて色は俱に素たり

氷の砕かれる様子は美玉を落としたかのようにきらきらしており、四角くなっている様子は美玉を切りそろえたかのように。真つ白な壁には寒気を生じ、象牙で作られた座席は敷き詰められている。玉製の壺も絹で作った扇も氷と同じく透き通って美しく、同席の美人の色はみな白い。

宴席での様子を詠む。氷の美しさと涼しさに触れ、また同じ場にある器物や美人の、透き通っていたり、白かったりする美しさを描写する。

9 咫尺炎涼變四時

咫尺の炎涼 四時を變ずるがごとし

10 出門焦灼君詎知

門を出づるの焦灼 君詎ぞ知らんや

11 肥羊甘醴心悶悶

肥羊甘醴あるも心は悶悶たり 此を飲めば瑩然として何の思ふ所ぞ

12 飲此瑩然何所思

ふ所ぞ

わずかな土地の暑さ寒さは四季が変わったかのように涼しくなったため、戸外の酷熱について君は知ることもないだろう。うまい羊やおいしい酒があっても心が晴れることはなかったが、この氷を飲めば気持ちがつっきりとして思い悩むことはなくなった。

宴会の場と外部の温度差を述べ、室内の快適さや、氷を飲むことによってもたらされる心の平安を詠む。

13 當念闌干鑿者苦

當に念ふべし 闌干として鑿つ者の苦を

14 臘月深井汗如雨

臘月の深井に汗 雨のごとくならん

あちらこちらで氷を掘り出しているものたちの苦勞を思うべきである。彼らは冬十二月の深い井戸の中で

汗を雨のように流していることだろうか。

前段までの氷の恩恵を届けてくれる作業者に思いを致す必要があると述べる。身分の高いものが暑い夏を快適に涼しく過ごすために、冬の寒い中、汗を流すほどに熱を発生重労働である氷の掘削をするものがあるという、風刺の心が込められている部分である。²⁾

以上のように、韋応物「夏冰歌」は氷を使っている夏の宴会の涼しさ、あるいは氷そのものや、宴会の場の美しさを詠い、最後に冬に氷を取るために働く人たちに感謝するべきだと詠んで締めくくられる。

では、「冰賦」の内容はこれと比較してどのようなものなのだろうか。

二 「冰賦」の内容

まず、「冰賦」の見取り図を示すと、以下のようなものである。

〔第一段落〕 舞台設定（序）

〔第二段落〕 賓客の答え①氷の短所の概説

〔第三段落〕 賓客の答え②氷の客観的な特徴

〔第四段落〕 賓客の答え③氷の短所の詳説と

陳王への忠言

〔第五段落〕 陳王の反省（結）

第二段落は、賦の舞台設定をする部分である。大屋根

の下、日光の差さないところにいて、竹のむしろや扇を用意していてもやりすぎせない暑さの中、陳王曹植が鬱屈した気持ちを発散するために王粲を上客として宴席を設ける。そのときに、賓客たちに氷を配布して暑さが少しの間でも和らぐことを喜ぶ。そこで陳王は、

含皎皎兮瓊玉姿、氣淒淒兮奪天時。飲之瑩骨兮何所思。可進於賓。請客卿爲寡人美而賦之。（皎皎たる瓊玉の姿を含み、氣は淒淒として天の時を奪ふ。之を飲めば骨を瑩ぎ何の思ふ所ぞ。賓に進むべし。請ふ客卿寡人の為に美として之を賦せんことを。）

真つ白な瓊玉の姿を含み、氣は寒く今現在、天の定めている夏の暑気を奪い取る。この氷を飲めば骨まですつきりと磨かれるように何を思い悩むことがあろうか。お客方に氷を進呈しよう。どうか私のために、氷を褒め称えて賦を作ってくれないだろうか。

と歌い、賦の製作を客である王粲に依頼する。³⁾

第二段落では、曹植の依頼を受け、王粲が賦を詠みはじめる。その初めに、「美則美矣。而大王不識其短。」（美なるは則ち美なり。而るに大王 其の短を識らず。）と、曹植が氷の短所を知らないことを責める。具体的には、

夫謂之瓊玉、竊名器也。氣奪天時、干陰陽也。內熱

飲之、媒其疾也。寵一物而三失德。（夫れ之を瓊玉と謂ふは、名器を窃するなり。氣天の時を奪ふは、陰陽を干すなり。内熱ありて之を飲まば、其の疾を媒するなり。一物を寵して三たび徳を失す。）

と、①氷を宝石にたとえることが名器の名を冒すことになること、②夏の特徴である暑さを奪うことが寒暑の調子を狂わせることになること、③体内に熱を持つている状態で氷を飲むと病になること、の三点の短所を挙げる。その上で、次のように言う。

且出寒暑而至下、薦宗廟而至高。僕竊感之而獻歎。安得不爲之而抽毫。（且つ寒暑を出だすは至下にして、宗廟に薦むるは至高なり。僕竊かに之に感じて歎歎す。安くんぞ之が爲にして毫を抽かざるを得んや。）

氷を使い、人工的に暑さ寒さを制御することは最低で、氷を宗廟に備えることが最高である。王が宗廟に氷を備えることなく、人工的に暑さを抑えるために氷を使うことが残念で、賦を作つて言上せずにはいられないと言う。

第三段落では、氷の特徴と、氷ができる過程を述べる。

夏の暑さの中でも冬の寒さを保ち続けていること（「居炎天之赫赫兮、獨嚴厲乎稜稜」——炎天の赫赫たるに居りて、独り嚴厲乎として稜稜たり）を述べたのち、そうした特徴を持つ氷のできる過程を次のように詠む。

其始也、月玄冥、日北陸、天地閉、水泉縮。動靜一變、剛柔反覆。壯以烈風、積如羣玉。由是、依廣澶漫、憑高崢嶸。大寒御節、萬物潛形。（其の始まるや、月は玄冥、日は北陸、天地閉ぢ、水泉縮む。動靜一変し、剛柔反覆す。壮なるは烈風を以てし、積まること羣玉のごとし。是に由りて、広きに依りて澶漫たり、高きに憑きて崢嶸たり。大寒の節を御するや、万物形を潜む。）

その始まりは、月は冬の神玄冥がつかさどる孟冬十月、太陽は北の天道を通り、天地が閉じ、泉が縮こまるような季節です。動くもの、静かに動かないものは一度に変化し、堅いもの、柔らかいものが反転します。氷の堅さは激しい風の冷たさによつて作られ、積み上げることと言つたら多くの宝玉が重なっている様子にも見えます。こういうわけで、広い場所では広がつていき、高いところにおいては険しく高い様相を呈します。大寒の時期になると、万物はその姿を隠します。

ここでは、氷について褒めたり批判したりすることなく、客観的な描写がされている。これに続いて、

浮彩浩浩、仰吞素靈、羣山早曙、陰壑夜明。（浮彩浩浩として、仰ぎて素靈を吞み、羣山早に曙け、陰壑夜に

明るし。)

彩りがあつて白く、空を仰いで白い精霊を飲み込んで
いるかのような色で、山々は早くに夜明けを迎えるか
のようで、暗い谷は夜に明るさを保っています。

とあるのは、氷が冬の清冽な空気の中にきらきらと輝く
様子や、その明るさを詠み、氷の美しい側面に着目する。

第四段落では、第二段落で触れられている短所をさら
に詳説して、氷の害悪を批判的に述べる。この段落の内
容からは諷諭の精神を読み取ることができる。まず①氷
を宝石にたとえることに関連して、次のように言う。

若尊卑異等、頒命有度、碎似墜瓊、方如截璐。況粉
壁雲矗、象筵霜布、座有麗人、皎然俱素。雖衆賁之同
輝、諒爲物之難固。其竊名假質、以謬一時之賞也如此。
(尊卑等を異にし、頒命に度有るがごときは、碎かる
ること瓊を墜とすに似て、方なること璐を截るがごと
し。況んや粉壁雲矗として、象筵霜のごとく布かれ、
座に麗人有りて、皎然として俱に素たるをや。衆賁の
輝きを同じくすと雖も、諒に物を爲すの固たること難
し。其の名を窃み質を仮り、以て一時の賞を謬つや此
のごとし。)

身分の高い者と低い者がその等級を異にし、氷をくば

る命令に区別があるようなことについては、次のよう
に言えます。氷を砕く様子は美玉を落としたのに似て、
氷が四角くされている様子は美玉を切りそろえること
にたとえられるように美しいものです。ましてや白い
壁がそびえ立っており、象牙で作った座席が霜が降り
たかのように敷き詰められ、宴席に美人をはべらせ、
部屋中が真っ白になっている状況であればなおさらで
す。しかしながら、多くの賓客の氷は輝きを同じくし
ていますが、本当のところは玉のように形を保って個
体であり続けることはできないのです。その名を盗み、
本質を仮託することで一時のほまれをあやまつて得て
しまうのはこのようであります。

氷が美玉の名を借りてしまうことがよくないのは、玉
のように美しさを保ち続けることができないにも関わら
ず、玉と同等の評価を受けられると錯覚させてしまうこ
ろにあると述べる。

この部分は、はじめに身分の差があることで、命令に
差が出てくることを言うから、「氷」を通して身分の差異
に関わることを批判している部分だと考えられる。これ
に続く氷の美しさや部屋の白さは、身分の高いものの得
る誉れ、あるいは身分の高いものの属する場Ⅱ官僚世界
を象徴しているものであろう。この中で、見た目は同じ
く立派だが、その内実は氷が溶けるように、誉れを受け
つづけるに十分な性質を保ち続けることができないもの

がいて言うのだろう。つまり、高官の内実と、外面として表れる身分との釣り合いがとれていないことに對し、夏の氷の性質を借りて風刺している部分だと考えられる。

②寒暑の調子を狂わせることについては、次のように言う。

若乃對修竹、臨方塘、俾炎作寒兮反我天常、嗟絺綌之失御於三伏兮、亦紈扇委篋而內傷。其嚴沍之威、以干陰陽之候也如此。(乃ち修竹に對し、方塘に臨み、炎をして寒を作し我が天の常に反せしむるがときは、嗟絺綌の御を三伏に失ひ、亦紈扇は篋に委ねられて内傷す。其の嚴沍の威の、以て陰陽の候を干すや此のごとし。)

長い竹に對面し、四角い池のそばに行き、炎天を寒くさせ、われわれの天の道理に反するようなことをさせると、ああ、葛で作った夏服はその能力を三伏という暑い時期に失うことになり、また絹で作った扇も箱に入れられて心を傷つけられることになるでしょう。その厳しい寒さの力が陰陽の時節を侵害することといったら、このようなものであります。

葛で作った夏服や絹で作った扇は、夏の暑いさなか、涼しさをもたらすものである。つまり、氷を使つて余計なことをすること、これらの器物が用をなすことがで

きなくなるといふことを述べる。この部分を①と同様に官僚世界のたとえと考えるならば、いわゆる「侵官之害」の発想に似て、他の人の職域などを侵すことの害悪を風刺していることが出来る。

③病気になることについては、次のように詳説する。

若皎潔的礫、與時消釋、或沉珠於杯、或化璞於液、王將甘飲、聊以自適。豈知乎、一寒一溫、日夜相激、久之以生疾兮、内外不和而怵惕。其翫意而媒疾也如此。(皎潔的礫として、時と身に消釈するがごときは、或いは珠を杯に沈め、或いは璞を液に化するがごとく、王將て甘飲し、聊か以て自適す。豈に知らんや、一寒一溫、日夜相激しく、之を久しくして以て疾を生じ、内外不和にして怵惕あらんことを。其の意を翫びて疾を媒するや此のごとし。)

氷が白く明るいままで、時の移り変わりによつて融けていくことについては、あるいは宝玉を杯に沈め、あるいは宝玉が液体となるかのように思え、陳王様はそれを飲むことで、しばらくよい気分になることができるでしょう。ただ、王はご存じないのでしよう、ひとたび寒く、ひとたび温かいという状況が日夜に激しく繰り返され、長い間続いていると病を生じ、体内外がおだやかでなく、おどろきおそれることになってしまうことを。情趣を追求して病をまねくのは、このよ

うであります。

美しい氷を杯に入れたり、氷を溶かしたものを飲んだりすると、その場での気分はよくなるが、長い目で見ると寒さ暑さを繰り返すことで体を病にかかりやすい状態にしてしまうという。これも①の続きとして、一見良さそうなものを取り入れた結果、国全体に深刻な悪影響を及ぼしてしまうことを風刺しているのだと考えられる。ここまでを承けて、最後に王粲は陳王に忠言を述べる。

觀其力足以淒一室、利庖厨、俾甘肥晚敗、醇釀不渝。非可調湊理、安營魄。奈何以誇客。（其の力の以て一室を淒とし、庖厨に利ありて、甘肥をして晩く敗せしめ、醇釀をして渝はらざらしむるを觀よ。湊理を調し、營魄を安んぜしむるべきに非ず。奈何ぞ以て客に誇らん。）

氷の力が一部屋を涼しくし、厨房にとつてよい効果があり、うまい食べ物を腐りにくくし、うまい酒の味を変わりにくくさせるのに十分であることをご覧になってください。肌や肉の間の温度を調節するためであるとか、魂を安んずるためであるとかの目的に使わないでください。どうして客にほこらしげに自慢する必要がありませんか。

厨房での使用にこそ、夏の氷のメリットが存在し、暑

氣払いのために使つてはならないというのは、使いどころを過つてはならないことである。「適材適所」を守り、国を治めるべきだとしても述べているのであろう。第五段落では、ここまでの王粲の賦を承け、陳王曹植が最後に次のように述べて作品が終わる。

寡人生於深宮、懽於服食。左右唯燕姬趙女、侈服美色。微客卿之言、則何以雪余惑。方當命有司而撤冰、書盤盂以自式。（寡人深宮に生まれ、服食に懽し。左右唯だ燕姬趙女ありて、侈服美色あり。客卿の言を微とすれば、則ち何を以てか余が惑ひを雪がん。方に当に有司に命じて氷を撤き、盤盂に書して以て自ら式とすべし。）

わたくしは宮殿の奥で生まれ、服飾や食事のことには理解がありません。身の近くには燕の姫や趙の美女がおり、豪華な服と美しい女性に囲まれています。上客王仲宣どのの意見を軽んじてしまえば、どのようにしてわたくしの惑った心をすぐことができましようか。今より役人に命じて氷をまかせ、円盤と方盂に自らを戒めるきまりを記しておくことにいたしましょう。

自らの見識の狭さを反省し、王粲の意見を尊重して文言を盆に刻み、自戒のためのものとするという。

「夏冰歌」との共通点として、「冰賦」の語彙、あるい

は表現が「夏冰歌」の語彙・表現と重複することが挙げられる。「夏冰歌」の第1句の「玄泉」、第5・6句「辟如墜瓊方截璐、粉壁生寒象筵布」、第7句「紈扇」、第8句「座有麗人色俱素」、第12句「飲此瑩然何所思」がそれである。同じモチーフを、似た表現を使って表現するあたりには、韋応物のこだわりが見える。また、「夏冰」を通して諷諭性を持たせるといふ点も共通する。

問題となるのは、こうした諷諭という主題を共通に持ち、同一のモチーフを用いて、同じようなことばを使っているが、「氷」に対して異なるイメージを、読む者に与える点にある。たとえば、「冰賦」第四段落の、「碎似墜瓊、方如截璐。况粉壁雲矗、象筵霜布、座有麗人、皎然俱素。」という表現があつた。これは、「夏冰歌」第5・6句、第8句と同様の表現と見なせる。この表現を使つて、「夏冰歌」では純粹に氷の美しさや、氷のある宴会の場がきらびやかであることを詠う一方、「冰賦」では氷のマイナス面をも導き出す。この氷のマイナス面に着目し、諷諭性を込めるところに韋応物「冰賦」の特徴があると考えられる。では、そうした詠み方をする背景としては、どのようなものが考えられるのであろうか。

三 「冰賦」の諷諭性の背景

韋応物の人生は玄宗の側近でなくなったことに起因する挫折感に大きく支配されていた。彼はそうした挫折感を抱き続けてきた中で、諷諭詩を多く作っている。「冰賦」

の為政者批判もそれと同じ軸で考えていくことができる。韋応物詩には、しばしば官吏としてのあるべき姿を詠んだものが見受けられる。たとえば、洛陽丞期の作である49「示従子河南尉班」(巻二)の序には、「永泰中、余任洛陽丞、以撲扶軍騎。時従子河南尉班、亦以剛直爲政。俱見訟於居守。因詩示意。府縣好我者、豈曠斯文。」(永泰中、余洛陽丞に任ぜられ、以て軍騎を撲扶す。時に従子河南尉班も、亦た剛直を以て政を爲す。俱に居守に訟せらる。詩に因りて意を示す。府県の我を好む者、豈に斯の文を曠しくせんや。)とあり、官吏として剛直であることがよいという意識が窺える。このように、気骨があり、正直であることによつて訴えられることとなり、自分たちの政治の仕方了他者に理解してほしいという言い方をしていることは重要である。

この発言から、韋応物がよい政治をしようとしていたことを妬んだり、あるいは彼を邪魔だと思つた人物がいたりしたのでと考えられるが、訴えられるに至るまでの具体的な経緯について、沈作喆「補韋刺史伝」は「永泰中、遷洛陽丞。兩軍騎士、倚中貴人勢、驕横爲民害。應物疾之、痛繩以法。被訟弗爲屈。」(永泰中、洛陽丞に遷せらる。兩軍の騎士、中貴人の勢に倚りて、驕横して民害を爲す。応物之を疾み、痛繩するに法を以てす。訟せらるるも爲に屈せず。)とまとめている。ここに見える「兩軍の騎士」は、回紇軍と神策軍を指す。安史の乱を平定するために、回紇軍や地方軍であつた神策軍の力を借り

たが、そのうち、神策軍が天子の禁軍となり、宦官によってコントロールされるようになった結果、宦官の兵権掌握が進んでいった。こうした中、神策軍は略奪を繰り返すなど、横暴な振る舞いをするようになる。このことを韋忠物は同じく洛陽丞期の作³⁵⁹「広徳中洛陽作」(巻六)で「飲藥本攻病、毒腸翻自殘。」(薬を飲みて本より病を攻めんとするも、腸を毒して翻つて自ら残ふ。)と表現している。

韋忠物が挫折後初めて官吏、すなわち洛陽丞に就任した広徳年間の状況はこのようであった。当時、韋忠物の考えるよい政治に向かつていかなない人物として宦官があり、その影響下にあつたものたちもいたことだろう。「冰賦」作成時には、こうした人物たちの存在が念頭にあつたと思われる。このままでは「良吏」が不利益を被り、奸臣がはびこるようになってしまふという危機感が、「冰賦」の表現になつて表れたのだと考えられる。

改めて「冰賦」の表現と関連させて考えてみる。

①内面と外面上の身分の齟齬という点について、韋忠物は政治をする上で剛直であり、正義を貫くような態度を重視していた。こうした性質を持つている人物こそが高位に在るべきだと考えていたと思われる。外面上美しく、内面にも永遠性を持ち続ける美玉は、そうした理想的な人物のたとえだと考えてよい。一方の氷は、玉の内面の性質である永続性を欠いている。これは、外面上は高位にあるが、実際には国の安定のための善政を目指し

ていない宦官の様子とびつたり合う。

②越権行為について、宦官が天子の禁軍となつた神策軍を動かしていたことが念頭にあつたのだろう。「冰賦」に見える、「氷があることで本来夏に働くべきであつた器物が働けず、天の時期を奪つてしまふ」という表現は、宦官の行為によって、本来よく動けたはずの善良な官吏がまともに働けなくなり、天子の統治している政治機構そのものが十分な機能を果たせなくなつた状況と重なる。

③一見良さそうなものを取り入れた結果、国に悪影響を及ぼすことについて、「冰賦」の「氷を飲むと気持ちがいよいよ、病の仲立ちとなつてしまふ」という表現は、先に挙げた「広徳中洛陽作」の「飲藥本攻病、毒腸翻自殘。」と同じこと、つまり回紇軍と神策軍の利用の弊害を表していると考えられる。

このように見てくると、「冰賦」は玄宗亡き後の宦官の専横を批判しているものだと思えることができる。韋忠物の「良吏としての自覚」が、「夏氷」のモチーフに目をつけさせ、従来、見られなかった「夏氷」の短所を詠み、諷諭性を付与する表現の創出につながつたのだろう。

おわりに

本稿では、韋忠物「冰賦」について、彼が同じく「夏氷」をモチーフにして作つた「夏氷歌」との違いを考えながら、その諷諭性とその背景について論じてきた。

韋忠物はなぜ「夏氷歌」ではなく、「冰賦」で「夏氷」

のマイナス面に着目し、それを通して諷諭性を表現できたのか。臆測に過ぎないが、一つには、「賦」というジャンルを持つ、対象物のあらゆる性質を列挙するという特性に着目したのではないかと考えられる。つまり、「夏冰歌」は「歌」であるから、自ずから使える字数の制限があつただろうし、ある程度の内容の方向性も決まつてしまひ、「冰賦」に見られたような、氷の様々な面を叙述するのにはあまり向かないと考へていたのではないだろうか。賦であれば、その性質上、多面的な見方が許容・促進され、従来あまり見られなかつた「夏冰」の短所を意識しやすくなる。「夏冰」の短所を賦の方に入れて詠んだのは、このあたりに理由があるのかもしれない。

現存の韋応物の賦が「冰賦」のみであることから推し量るに、そもそも韋応物は賦作品を多くは作つていなかっただろう。韋応物詩には、諷諭性の高い「歌行」が幾つか見られる。韋応物はなぜ「賦」を初めとする散文を多作する方法を採らず、「歌行」で諷諭性を表現することになったのか。これと関連して、今後、「冰賦」と『文選』所収の賦との関係についても考へたい。表現や構成の面で、「冰賦」は『文選』所収の賦と重なる部分がある。これを詳細に検討し、併せて韋応物詩と『文選』所収の作品との関係を考察すれば、韋応物が賦をあまり作らなかつた理由の解明、ひいては、韋応物の文学観の理解にもつながると思われる。

また、「賦」の歴史の中で、韋応物「冰賦」がどのよう

な位置づけにあるのかも考察していく必要がある。これらの点については、稿を改めて論じてみたい。

注

- (1) 前野直彬『中国文学序説』（東京大学出版社、一九八二年）九八頁は、賦を韻文のジャンルに入れて解説されているが、ここでは伝統的な分類に従つておく。
- (2) 赤井益久氏は、「夏冰歌」を「政治の腐敗を指摘し、民衆の窮状を描写する作」と分類されている。「韋応物と白居易」『中唐詩壇の研究』第Ⅱ部第一章、創文社、二〇〇四年）一一三頁。
- (3) この曹植が賦の製作を依頼し、王粲が返答として賦を作るという設定は、謝莊「月賦」(『文選』卷十三)に先例があり、これを意識していると思われる。
- (4) この表現と似たものに、「幽居」(巻八)に「貴賤雖異等、出門皆有營。」(貴賤等を異にすとも、門を出づれば皆営み有り。)とある。
- (5) 年代的に韋応物が見得たであろう類書『芸文類聚』には、少なくとも「夏冰」の短所に関する記事は見られない。
- (6) 宦官の専横に至るまでの経緯は、赤井益久「韋応物詩論——屏居の位相を中心に——」『中唐詩壇の研究』第Ⅰ部第三章五九頁〜六一頁)を参考にまとめた。
- (7) これについては、前掲注(2) 赤井著書「第六節 良吏としての自覚」一一五頁〜一一九頁参照。